

## 櫻井欽一博士とその足跡—出逢いと運命—

濱田隆士 (館長)

「エ、いらっしゃいまし！」  
威勢の良い声が奥のお帳場から玄関先に飛んできます。神田須田町一丁目といえは、それだけでもチャキチャキの江戸っ子が誇りにする一角。

神田のとり料理「ぼたん」となる  
と、おそばの「藪」と並んで界隈の名だたる老舗(しにせ)。その「ぼたん」のご主人が櫻井の欽ちゃん、誰からも愛された町の“アマチャ学者”櫻井欽一先生です。もちろん声の主。

専修大学を中退。ご本人は、筋だった勉強なんざしてませんヨ、とあっさりいなされてしまいますが、鉱物学というまことにお門違いの畠で押しも押されもしない世界の大御所。自ら発見された「湯河原沸石」という美しい鉱物の研究で東京大学で理学博士の学位を取っておられます。

鉱物の先生ならどんな堅物(かたぶつ)かと思われそうですが、とんでもない柔者(やわもの)。歌舞伎・相撲・怪談・探偵小説・マンガ「さざえさん」びいきで河童研究家でも通用する、まことにマルチな方なのです。それだけに、博士号の時はマスコミ界が大騒ぎでした。

### 押しかけ小僧

その櫻井欽一先生の座しておられるお帳場に、ある日一人の中学生が上がり込んでいました。終戦で転勤の父親について九州から上京してきた田舎っぺの男の子でした。途中、京都で西にこの人ありとうたわれた鉱物の大家、日本鉱物趣味の会を主催する益富寿之助(ますとみかずのすけ)先生の紹介をもらってきたというのです。

どこがどう気に入られたのか、その子の「ぼたん」通いが始まります。櫻井先生が風邪で伏せっておられるのにその枕元でクダを巻くような存在にまでなってしまうのです。好きだけで鉱物がわかるわけではありません。適切な標本をいくつも出しながら丁寧な手引きをしてくださるといふ大幸運に恵まれた男の子は、鉱物の肉眼鑑定術という変わったジャンルにのめり込んで行きました。

### 無名会という修練の場

櫻井先生は、東京中心に無名会という

アマチュア鉱物家集団を一手に引きうけて主宰しておられました。月1回の例会、そして時折り皆で出かける採集会。皆(オール)出席に近いフィーバーぶりの男の子は、いつの間にかその無名会の通知係となり、学校はそこそこに、ますます鉱物熱に浮かされていったのでした。

櫻井先生は、科学博物館の嘱託も兼務しておられました。戦時中に、博物館を“占拠”していた日本軍は、冬の寒さをしのぐため鉱物標本を中庭にブチマケて、入れ物の木箱を燃やして暖をとりました。その小山から標本類を一つ一つ洗って、ラベル合わせをして元に戻す作業の指揮をとっておられたのです。

男の子はこれに飛びつきました。何しろ、世界・日本の名産地からの鉱物・岩石・化石が手にとって見られるのです。当然、鑑定能力はグーンとアップし、石の面(つら)だけから産地まで当られるようになり、無名会での成績もなかなかのものになったようです。

### 貝に凝る

いつの間にか時は過ぎ、仲間だった子供たちはそれぞれの大学へ職場へと進みました。東京大学地質学教室というまさに正道を歩まれた中には、一つ年上の加藤昭さんがいました。男の子はどう道を過ったのか、横浜国立大学の化石の大先生である鹿間時夫先生の所に入門していました。鹿間先生は、アダナをホネという本来脊椎動物化石専門の先生でしたが、壺、民俗布地、印材、コケシ、貝の世界でも名の高いコレクターで、しかも櫻井先生の“悪友”でもありました。

その鹿間先生の悪影響をモロに受けた青年は、化石を放り出して、一緒に現生の貝集めにのめり込んだのです。コレクターライバルの櫻井先生の貝集めが同時に始まりました。二人の大家の間に見えがくれするその道専門家に奥谷喬司さんがおられたのが、どうやら事勢を勢いづけていたようです。

### 櫻井標本室

青年は、結局、鹿間先生の許でも化石をやらず、鉱物に近い変成岩類をテーマに卒論を書いてしまい、そのうえ東京大学地質学教室の誇る小林貞一



ミネラルショウにて(1993年6月)。

教授の大学院で化石を学ぶ、などと言いつつ始末でした。どうやら鹿間先生の後押しもあったようですが、それでも規定の五年を過ぎ、めでたく博士課程を終えることになったのでした。

櫻井先生は、目標とされた『日本鉱物誌』の完成を急がれると共に、貝と化石集めに一層の磨きをかけておられ、その結果、1960年「櫻井標本室」が完成し、益富先生と青年との共著になる『原色化石図鑑』にもそこから多くの逸品が収載されました。コレクターのパワーと、天才的な学者気質とが併せて発揮され、町のアマチャとの自稱がますます光り輝いたものでした。

### コレクション オブ コレクションズ

ところが、鹿間先生、益富先生に続いて、1993年、櫻井先生までもが後を追うように他界され、日本の三巨星が一気に落ちる悲しい事態となりました。ご遺族のご配慮から櫻井コレクションの対比用日本産鉱物標本・外国産鉱物標本および貝類標本は、由縁の深い国立科学博物館へ。そして、研究遺品の数々を含め、残りのほとんどが生命の星・地球博物館へ収められ、館が力を注いでいるコレクションオブコレクションズに花を添えることになったのでした。奇しくもそれに先立って、競い合っていた鹿間貝類コレクションが同じくそこに収まっていた。因縁とはそんなものなのでしょう。

そして、その生命の星・地球博物館の館長の座には、かつての押しかけ小僧の姿がありました。特別展「櫻井コレクションの魅力」の開催を目前に、ひとしお深い思いで振り返る彼なのでした。